

ガジャンビラ丘陵遺跡

ガジャンビラ丘陵遺跡発掘調査報告書

1983年2月

沖縄県那覇市教育委員会



遺跡周辺の空中写真



① 遺跡近景（那覇港側より）



② 丘陵北側崖面

発 刊 に あ た っ て

本事業は、沖縄開発庁沖縄総合事務局南部国道事務所の委託を受け、沖縄県教育委員会の指導のもとに実施してまいりましたが、同調査が無事終了し、ご報告できましたことは、当事者として意義深く思うものであります。

この遺跡は、昭和56年度に実施した市内遺跡分布調査で破壊されていることが発見されたものであります。

調査の結果、遺跡はこれまでの開発によってその大半が破壊されており、遺構を確認することはできず、遺物を包含した層もほとんどが削りとられた状態であります。したがって遺物の出土量はきわめて少なく、これらは石灰岩の窪みにかろうじて残されたものであります。

このように厳しい状況にありますが発掘調査によって得られた土器や石器などの考古資料は広く市民の学習に活用できるように展示したいと考えています。それによって多くの市民が埋蔵文化財についての理解を深めることができれば幸いです。

最後に今回の調査に快く御協力していただきました地主の皆様を始め、指導及び現場で調査に携われた方々に深く感謝申し上げます。

昭和58年2月10日

那覇市教育委員会

教育長 伊 波 静 男

例 言

1. 本報告書は国道331号改築工事に伴い、国道建設予定地内に周知されているガジャンピラ丘陵遺跡の発掘調査を行い、遺跡の記録保存を図ったものである。
2. この事業は沖縄開発庁沖縄総合事務局南部国道事務所の依頼を受けて那覇市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘作業は昭和57年7月6日から9月10日まで実施され、その後昭和58年2月まで整理作業、報告書編集を行なった。
4. 発掘調査にあたり、次の方々の指導助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
多和田真淳（那覇市史編集員）
高宮廣衛（沖縄国際大学教授）
高元政秀（興南高等学校教諭）
知念勇（県立博物館学芸員）
5. 石質の同定は県立博物館の大城逸朗氏にお願いした。記して感謝申し上げます。
6. 本報告書に使用されている2万5千分の1地形図及び2千5百分の1国土基本図は国土地理院発行の地図を複製したものである。
7. 出土品の整理・実測は大田宏好、平良真博、仲原敦子、名嘉山広美があたり、写真撮影は仲地洋があたった。執筆は次のとおりである。

第Ⅰ章……………仲地 洋

第Ⅱ章……………大田 宏好

第Ⅲ章…………… ”

第Ⅳ章…………… ”

第Ⅴ章…………… ”

第Ⅵ章……………上原 静

8. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 那覇市教育委員会

調査責任者 伊波静男（教育長）

調査事務局 金城幸明（社会教育課長）

山内昌志郎（社会教育課文化係長）

仲地 洋（社会教育課文化係主事）

発掘調査員 上原 静（沖縄県教育庁文化課専門員）

調査補助員 大田宏好（沖縄考古学会員）

発掘作業員 友利健二、山城吉勝、座安 功、大西 智、高安正裕、城間智子
玉城一浩、上原良二、照屋政一、玉城雅彦、仲地正充、城間桂子
仲田比呂志、佐久本和博、上原三千子、津波ひとみ、(以上 沖
縄大学学生) 平良真博、当間健勇、当間恵子、久場治、砂川勝
比屋根健三郎、新垣敏、仲松豊彦、玉寄広美、上原豊、上原隆、
(順不同)

目 次

第 I 章 調査に至る経緯.....	1
第 II 章 遺跡の位置と環境.....	2
第 III 章 調査の経過.....	6
第 IV 章 層 序.....	7
第 V 章 出土遺物.....	11
A 自然遺物.....	11
B 人工遺物.....	16
1. 貝製品.....	16
2. 石 器.....	18
3. 土 器.....	20
4. 須恵器.....	31
5. 土製品.....	31
6. 古 銭.....	31
第 VI 章 おわりに.....	33

第 I 章 調 査 に 至 る 経 緯

昭和56年9月28日、文化庁、沖縄県の補助事業の市内遺跡詳細分布調査において周知されたガジャンピラ丘陵遺跡の大半が国道331号の改築工事によって破壊されていることを確認した。

後日、沖縄開発庁沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所と略称します）沖縄県教育委員会、那覇市教育委員会の三者によって同遺跡の現状確認とその取り扱いについて協議した。その結果、遺跡が破壊されるに至った原因は、道路敷設が決定される前に文化財の有無の調査を実施せずに工事を着手したためであり、都市計画決定時に関係部に綿密な調整がなく、そのため遺跡の破壊を未然に防止することができなかったことが明らかになった。

このことを反省し、南部国道事務所長は文化財保護法第57条の3第1項に基づき昭和56年11月10日付で文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知をした。その回答として、沖縄県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について次の内容の指示を受けた。土木工事等については、文化庁の指導により発掘調査を行うこととなっているので、工事着手前に発掘調査を実施し、調査の結果重要な遺構が発見された場合はその保存等についての協議しますので御協力を願う。

その指示に基づき、南部国道事務所は土木工事の着手前に遺跡の発掘調査を那覇市教育委員会に委託して実施する方針で、那覇市教育委員会と数回に及ぶ協議を重ね、埋蔵文化財の位置及び範囲と発掘面積そして、発掘調査に用いる経費等を明確にし、相方共に、昭和57年度一般会予算に計上した。

昭和57年5月15日付で、昭和57年度一般国道331号ガジャンピラ丘陵遺跡発掘調査業務の委託契約を委託者「分任支出負担行為担当官沖縄総合事務局南部国道事務所長、友杉信男」を甲とし、受託者「沖縄県那覇市教育委員会教育長、伊波静男」を乙として締結した。

那覇市教育委員会は委託契約に基づき、発掘調査着手準備をして発掘に係る地主、富名腰ウシ、金城英光、建設省の承諾をいただき、昭和57年6月17日付で文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査通知をした。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

ガジャンピラ丘陵遺跡は那覇市小禄親川原 1787-38、1787-40、垣花町三丁目 68-1、68-2、68-4 一帯に所在する。

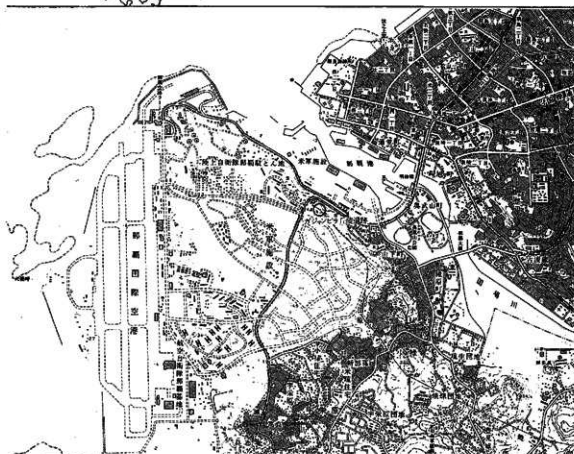
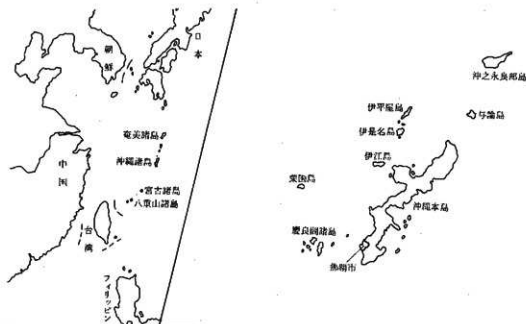
遺跡は標高 30~37 m の琉球石灰岩丘陵上に立地する。また、発掘地点から南東約 130 m の地点には洞穴があり、本遺跡に含まれている。

一帯の地質は島尻層群と呼ばれる青灰色のシルト質泥岩が基盤をなし、これに第四紀洪積世の琉球石灰岩がのっている。遺跡はその上に形成されている。崖壁に露呈したシルト質泥岩と琉球石灰岩との間は風化のため岩蔭が出来、墓として利用されている。

丘陵は北側に傾斜しているが、現在、その斜面の中腹を国道 331 号、さらに斜面下を国道 332 号が走っている。南側は最近まで軍用地として使用され、起伏の激しい地形となり、その合間を小さな河川が東から西へと流れている。丘陵は南東側に弧状に伸びており、住吉遺物散布地、山下町第 1 洞穴遺跡、トゥムイ古遺跡などが所在している。

ガジャンピラ（蚊坂）という名称の由来については「昔、唐から蚊を持ってきて、ここで放したので、ここをがじゃん坂と名付けた。」と民話にも残っており、また、中国の使臣はこの丘陵の山容が筆かけに似ているところから筆架山と名づけたといわれている。ここからは市街地をはじめ天久や首里、識名一帯の高台が見渡され、西方海上には慶良間諸島が眺望できる。

遺跡の東北から北西、那覇港から崎原の崎（元の鏡原の海岸で現在の那覇空港）にかけては優れた魚場が発達しており、古代から変らぬ環境であったと思われる、遺跡から貝、魚骨の出土量は極めて多い。

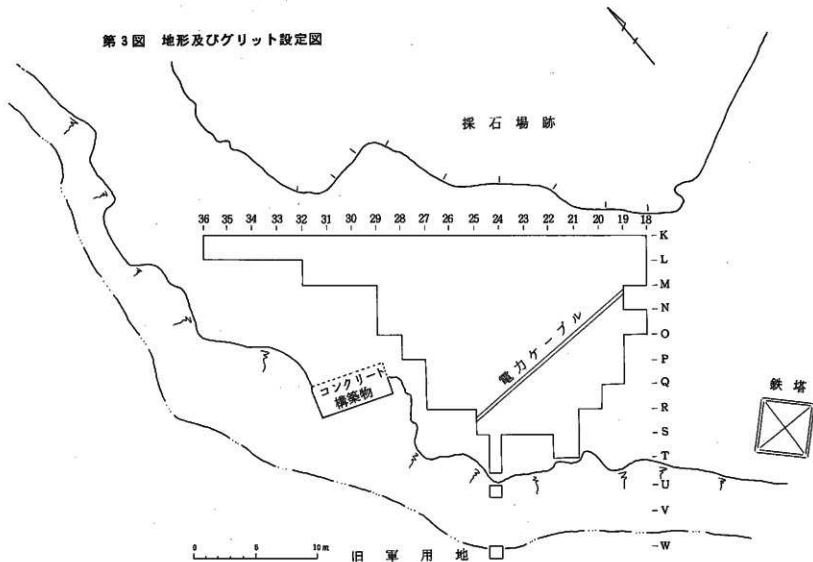


第1図 那覇市及びガジャンピラ丘陵道路の位置



第2図 ガジャンピラ丘陵遺跡及び周辺遺跡

第3図 地形及びグリッド設定図



第Ⅲ章 調査の経過

発掘調査は1982年7月6日に着手し、丘陵上の植物も萎える真夏の太陽の下で苦しい発掘作業が行なわれ、途中に2回台風が接近し悪天候のため調査が中断したがほぼ予定した調査を9月10日に終了した。

遺跡一帯はギンネム、ススキなどが繁っており、まず、その伐採作業から開始した。次にグリッドを設定した。グリッドは、遺跡の立地している丘陵が採石によってすでに北側が破壊されているため採石によってできた崖面に沿って行なった。第3図のように崖面にはほぼ平行して東側から西面へ18、19、20・・・、北側から南側へK、L、M・・・とし、グリッドナンバーは北東隅の杭とした。

発掘は道路改築工事範囲を完全に発掘する目標でKトレンチから開始したが、K-29から西側では表土層の下は石灰岩で遺物包含層は確認できず、L-29から西側でも同様であった。そこで、29ライン以西の発掘は中止して、それ以东を南側へと進めていった。そこでは遺物包含層は確認できたが、上部が削り取られて層が薄い割には石灰岩の凹地や割れ目に堆積しているため発掘に時間を要した。丘陵上の他にも採石によってできた崖下に丘陵上から堆積した状態で落下した箇所や、崖面の石灰岩の間に堆積している包含層で採石で露頭している箇所の発掘も並行して行なった。また、遺跡の南側の範囲を確認するため、南側斜面に24ラインに1×1mの2グリッド(U-24、W-24)を設定して試掘を行なったが包含層はなかった。

第 IV 章 層 序

発掘地点によって層序が異なるので説明の便宜上 3 地区に分けて記述する。

1. 丘陵上発掘地区

ここは破壊が著しいため現在の表土層から岩盤までは浅く 3 層しか残っておらず、すでに地表面に岩盤の琉球石灰岩が露出している箇所もあった。

第 I 層は表土攪乱層ではほぼ全体に見られ、西側から東側、北側から南側へと傾斜している。現代陶磁器などに混ざって土器、石斧などの先史遺物が検出されたが量的には少ない。O・P・Q-20 グリッドから東側一帯では高圧線鉄塔の基礎建設の際に岩盤までも除去され、その後、客土されている。ここでは 2.4 m の厚さになっている。

第 II 層は岩盤の琉球石灰岩凹地や割れ目に残っている茶褐色土層で先史遺物が最も多く出土する。層は厚い部分で約 30 cm を測るが、破壊の著しい所ではこの層は消滅している。上部は攪乱を受けており土器、石器、貝製品に伴って、現代陶磁器片、壺や硝子の破片、瓦、鉄片などが検出された。

第 III 層は L-22 グリッドのみで確認された黄褐色混雑土層で、無遺物層である。

2. 丘陵北側崖面

17 ライン延長線上の採石面で石灰岩の間にわずかに堆積している。ここでは丘陵上の発掘地区とは異なり 4 層が確認された。

第 I 層は表土攪乱層で石灰岩礫、コンクリート、鉄片などが混ざっている。シルト質泥岩の風化土で客土された層である。

第 II 層は黒褐色の遺物包含層で北側のみに残っており、南側では消滅する。層の厚さは 10～30 cm 前後で、西側から東側に急傾斜しており、2 次堆積と考えられる。この黒褐色土は他に崖下に堆積してただけで、丘陵上の発掘区では削られたためか残存していない。

第 III 層は地山の茶褐色土層で無遺物層である。第 II 層と同じく北側に僅かに残っていた。

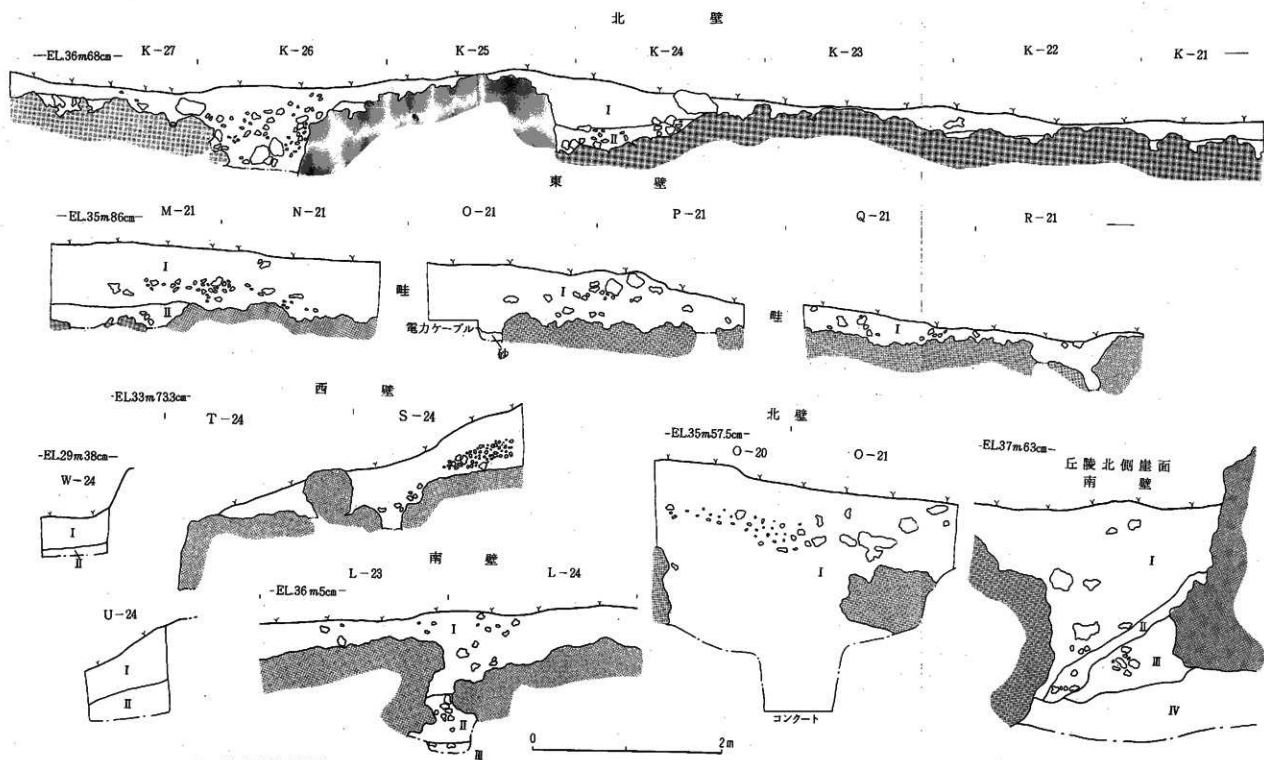
第 IV 層は基盤のシルト質泥岩である。

3. 丘陵南側斜面

U-24、W-24 の 2 グリッドを設けて試掘を行なった。ここでは基盤も含め 2 層が認められたが遺物包含層は存在しない。

第 I 層はシルト質泥岩の風化土で層厚は 40～50 cm 前後である。無遺物層である。

第 II 層は基盤のシルト質泥岩である。



第4図 壁面実測図

第 V 章 出 土 遺 物

本遺跡出土の遺物は自然遺物と人工遺物に大別される。自然遺物は貝殻がほとんどを占め、他に獣魚骨、自然礫などが出土した。人工遺物は土器が主体で、その他に貝製品、石器、土製品などが得られたが、骨製品の出土はなかった。以下、それらについて略述する。

A 自然遺物

貝殻、獣魚骨、自然礫、軽石が得られた。管見できる範囲では獣骨にはイノシシ、ジュゴン、牛(?)、魚骨にはベラ科、ブダイ科、フエフキダイ科などがみられる。専門家の正式な鑑定を待ちたい。

本遺跡から得られた貝殻は、総数2,033個で陸産貝3種、淡水産貝3種、海水産貝85種が同定できた。貝殻の算出方法は殻頂部が残っているものを1個体として二枚貝は左殻と右殻に分け、また、カンギク、チョウセンサザエは殻と蓋に分け数の多い方を個体数とした。貝殻の調査地区層位別出土状況を第 2 表、棲息地別出土状況を第 2 表に示した。なお、棲息地別出土状況には種不明は含めていない。

第 2 表 棲息地別出土状況

丘陵上発掘区	II層	全体							
		A	B	C	D	E	F	G	H
II層	I層	全体							
		A	B	C	D	E	F	G	H
II層	II層	全体							
		A	B	C	D	E	F	G	H
II層	II層	全体							
		B	C	D	E	F	G	H	
II層	I層	全体							
		A	B	C	D	E	F	G	H

A. 陸産

B. 淡水産

C. 潮間帯砂地

D. 潮間帯岩場

E. 潮間帯～潮間帯下砂地

F. 潮間帯～潮間帯下岩場

G. 潮間帯下砂地

H. 潮間帯下岩場

第 1 表 貝 類 集 計 表

調査地区 層 序		丘陵上発掘区			丘陵北側崖面		崖 下 表 採	合 計
		I	II	III	I	II		
貝 種								
陸 産 貝								
1	オキナワヤマタニシ	15	31				34	80
2	イトマンケマイマイ	2	2				11	15
3	シュリマイマイ	2	41				10	53
小 計		19	74				55	148
淡 水 産 貝								
4	ヒルギシジミ	4	14				56	74
5	シレナシジミ	5	10			3	41	59
6	オキシジミ	5	6			3	62	76
小 計		14	30			6	159	209
海 産 貝								
潮 間 帯 砂 地								
7	ホソスジイナミガイ	3	24				23	50
8	ハマグリ	1	1			1	5	8
9	アラスジケマンガイ		1				2	3
10	オオヌノメ	2					3	5
11	ヌノメガイ						2	2
12	チョウセンハマグリ						3	3
13	ウラキッキガイ	39	11			5	29	84
14	イソハマグリ	2	7				20	29
15	リュウキュウマスオ	1					1	2
16	カワラガイ						4	4
17	マドモチウミニナ	16	34			2	7	59
18	イトカケヘタナリ	1						1
19	ハイガイ	15	4				4	23
20	オハグロガイ		1					1
21	オハグロモドキ	1						1
22	シロミオキニシ		2					2
23	カワリボリチョウジガイ		7					7
小 計		81	92			8	103	284
潮 間 帯 岩 場								
24	ヤサガタミミエガイ						2	2

目 種	調査地区 層 序	丘陵上発掘区			丘陵北側崖面		崖 下 表 採	合 計
		I	II	III	I	II		
25	ア マ オ ブ ネ	2	2				6	10
26	コシダカアマガイ	2	4				9	15
27	リュウキュウアマガイ	1	1				3	5
28	ア マ ガ イ		1					1
29	コンペイトウガイ		1				2	3
30	タ マ キ ビ	1					1	2
31	ヒ メ ジ ャ コ	9	21			4	57	91
32	シ ラ ナ ミ	1	8				39	48
33	ハ ナ マ ル ユ キ		2				1	3
34	ハ ナ ビ ラ ダ カ ラ	4	4				4	12
35	コ モ ン ダ カ ラ	1	1					2
36	ナ ツ メ モ ド キ						2	2
37	カ ン ギ ク (ふた)	2	1				7(1)	10
38	マ ダ ラ イ モ	4	5				6	15
39	チュウクワノミカニモリ	2	1					3
40	カ ス リ カ ニ モ リ	1					4	5
41	トウガタカニモリ		1					1
42	カ ニ モ リ						1	1
43	ウ ミ ニ ナ	2	28				58	88
44	ウ コ ン ト ミ ガ イ	1						1
45	コ オ ニ コ ブ シ	19	48			25	25	117
46	イ ト マ キ ボ ラ	1	6				1	8
47	ヒ メ イ ト マ キ ボ ラ	1	1				1	3
48	リュウキュウカタベ	1					8	9
小 計		55	136			29	237	457
潮間帯～潮間帯下砂地								
49	マ ガ キ ガ イ	20	34				42	96
小 計		20	34				42	96
潮間帯～潮間帯下砂場								
50	オ ニ コ ブ シ		5				1	6
51	サ ラ サ バ テ イ		2				9	11
52	コ ブ シ カ イ		4					4
53	ヤ コ ウ ガ イ	1	3				14	18

調査地区 層 序		丘陵上発掘区			丘陵北側崖面		崖下	合 計
		I	II	III	I	II	表 探	
54	ア コ ヤ ガ イ	4	6				192	202
55	シ ロ ア オ リ ガ イ					1		1
56	ヒ ト エ ギ ク						1	1
小 計		5	20			1	217	243
潮 間 帯 下 砂 地								
57	リュウキュウサルボウ	1	6				4	11
58	サ ル ボ ウ	2	3				3	8
59	アンボンクロザメ	1						1
60	オキサワキヌヨウバイ	1						1
61	キ ン シ バ イ	1						1
62	ホソイトマキフデ		1					1
小 計		6	10				7	23
潮 間 帯 下 岩 場								
63	ギ ン タ カ ハ マ	9					8	17
64	ニ シ キ ウ ズ	4	4			1	14	23
65	ウズイチモンジ	3	3				8	14
66	イ ボ シ マ イ モ		9				1	10
67	サ ヤ ガ タ イ モ		1					1
68	サ ラ サ モ ド キ	1						1
69	ク ロ フ ト モ ド キ		7					7
70	ヤナギシボリイモ	2	30				9	41
71	ヤ キ イ モ		2					2
72	ク ロ ミ ナ シ	1					1	2
73	ア コ メ ガ イ						1	1
74	タカヤサンミナミ	1					1	2
75	ク モ ガ イ	7	6					13
76	サ ソ リ ガ イ						1	1
77	チョウセンサザエ(ふた)	(10)	(37)				2 (9)	56
78	マ ル サ ザ エ	2	1					3
79	ホ ラ ガ イ		1				1	2
80	カ コ ボ ラ		1				2	3
81	ショウジュウラ		2				2	4
82	メオニノツノガイ	2	4				6	12

貝 種	調査地区 層 序	丘陵上発掘区			丘陵北側崖面		崖下 表採	合 計
		I	II	III	I	II		
83	アラレツブリ						1	1
84	ヒレジャコ						2	2
85	シ ャ ゴ ウ						1	1
小 計		42	108			1	68	219
種 不 明								
86	シ ャ コ ガ イ 科						10	10
87	イ モ ガ イ 科	30	199			2	55	286
88	ウ ミ ニ ナ 科	24	3				18	45
89	ヒ タ チ オ ビ 科						1	1
90	キ セ ル ガ イ 科	2	1				1	4
91	ス エ モ ノ ガ イ 科						1	1
92	フ ジ ツ ガ イ 科		1					1
93	リ ュ ウ テ ン 科	1	3					4
94	ヒ メ カ タ ベ 科						2	2
小 計		57	207			2	88	354
総 計		299	712			47	979	2033
	パイプウニの棘		3				2	5
	カニのハサミ						624	624

※ 貝類の分類については、下記の文献を参考にした。

1. 平田義浩他 『沖縄の貝・カニ・エビ』 風土記社 1973年
2. 白井祥平 『原色沖縄海中動物生態図鑑』 新星図書 1977年
3. 吉良哲明 『原色日本貝類図鑑』 保育社 1982年
4. 波部忠重 『続原色日本貝類図鑑』 保育社 1982年

層別出土では第Ⅰ表は表土攪乱層で貝殻の出土は少なかった。第Ⅱ層は遺物包含層であるが前述したように上部が削り取られ、その下部にある石灰岩凹地にしか残っていないので出土量が減少したものと考えられる。崖下からは全体の50%近くが得られた。

貝種別ではアコヤガイ、コオニコブシ、マガキガイ、ヒメジャコなどが多い。また、チョウセンサザエは殻に対して蓋が圧倒的に多かった。このことは喜如嘉貝塚（註1）、久里原貝塚（註2）などと同様な傾向を示している。

棲息地別出土状況は陸産が3種で8.8%、淡水産が3種で12.4%、潮間帯砂地が17種で16.9%、潮間帯岩場が25種で27.2%、潮間帯～潮間帯下砂地が1種で5.7%、潮間帯～潮間帯下岩場が7種で15%、潮間帯下砂地が6種で1.4%、潮間帯下岩場が23種で13%となっている。これを層別に見ると陸産はⅡ層で全体の平均を上回っているが、崖面のⅡ層では出土していない。淡水産はⅠ・Ⅱ層とも全体の半分しか得られていないが、崖面のⅡ層および崖下ではそれを上回っている。

2 石 材

表採も含めて30個得られた。その内訳は第3表のとおりである。

第3表 石材出土表

調査地区 層 序	丘陵上発掘区		崖 下 表 採	合 計	備 考
	表採・Ⅰ	Ⅱ			
片状砂岩	1	1		2	慶良間諸島に多い
閃緑玢岩		1		1	
緑色片岩	1	1		2	
黒色片岩		1	1	2	
斑レイ岩	2	2		4	
砂質片岩	2		1	3	慶良間諸島に多い
細粒砂岩	2	8	6	16	方言名 ニービヌフニ
合 計	8	14	8	30	

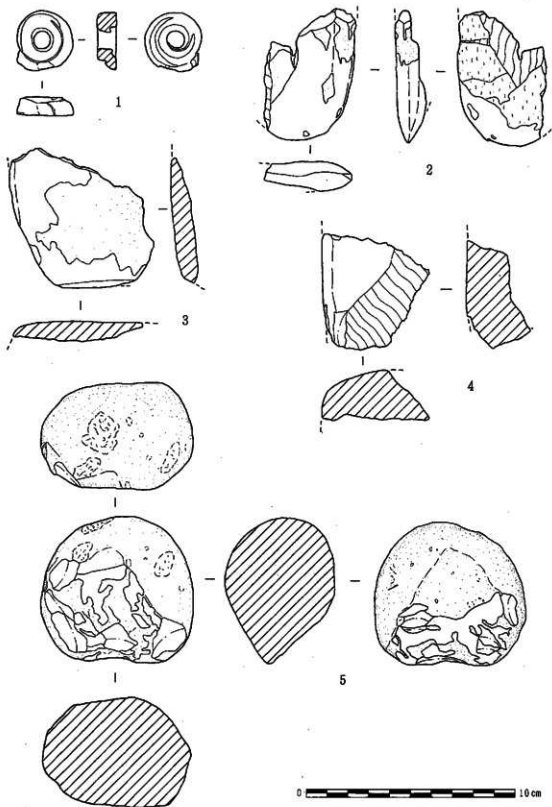
B 人工遺物

1 貝製品

貝製品は装身具の1点のみである。

(1) 巻貝製装飾品

第5図1はマガキガイの体層部の上部と螺頭部の両側から研磨を加え扁平状にし、螺頭部側の中央から孔を穿ってある。孔の大きさは外径約10mm、内径約8mm。厚さ9mm、重量10g。K-24 第Ⅱ層の出土。



第5図 貝製品・石器実測図

2 石 器

石器は6個得られたが完形品は1点のみで他は破損している。その器種は石斧1点、磨石2点、その他1点、不明2点である。

(1) 石 斧

第5図2は扁平の磨製石斧で頭部を欠損する。刃縁の平面形は弧状を呈している。表面では研磨面の他に自然面が残っている。裏面も研磨を施しているが徹底はしてない。重量50g。砂岩製 M-26 第I層の出土

(2) 磨 石

磨石と考えられるものは2点得られたが、いずれも破損しているため原形は窺えない。

同図3は表面の研磨は徹底しておらず、自然面が比較的多く残っている。これに対して側面は研磨が徹底している。表採によって得られた。重量60g。輝石安山岩製。

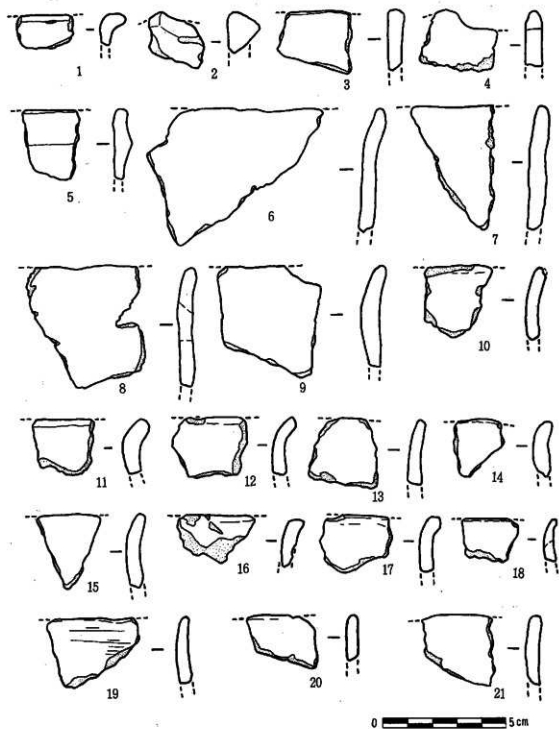
同図4は表面の研磨が徹底し、滑沢を有する。側面も研磨が施されているがわずかに自然面が残っている。表採によって得られた。重量90g。斑レイ岩製。

(3) 敲 打 器

同図5に示した全体観が球形を呈した完形資料であるが、側縁部に向い表裏から研磨がなされ一側面がクサビ形状をおびた石器である。両研磨面はいずれもやや中央部が彎曲していて研磨は入念ではなく自然面を残している。使用による敲打痕がみられ、研磨によってつくられた縁部と対応する側面に存する。前者は折り状をなし、後者は凹を呈している。いずれも敲打面は風化が認められる。最大長7cm、最大幅7.3cm、最大厚5.3cm、重量400g。角閃石安山岩製。L-25 第II層の出土。

第4表 遺物出土表

遺 物	地 区		丘陵上発掘地区		丘陵北側崖面		崖 下	合 計
	層 序		表採・I層	II	I	II	表 採	
貝 製 品				1				1
石 器			3	3				6
土 器			158	1,290		75	787	2,310
須 恵 器				1				1
土 製 品							1	1
陶 質 土 器			49	22			8	79
石 材			8	14			8	30
焼 土			12	152		2	54	220
軽 石				3			1	4
古 銭			2	3				5
現 代 遺 物			74	78		1	17	170
合 計			306	1,567	0	78	876	2,827



第6図 土器口縁部実測図

第5表 土器出土表

土 器	調査地点 層 序	丘陵上発掘区		丘陵北側崖面		崖 下	小	合
		表採・I	II	I	II	表 採	計	計
中期系土器	口 縁 部	3				2	5	55
	胴 部	4	23		1	22	50	
	底 部						0	
後期系土器	口 縁 部		17		1	25	43	2,100
	胴 部	117	1,135		71	677	2,000	
	底 部	8	30		2	17	57	
グスク系土器	口 縁 部		1			2	3	155
	胴 部	26	84			40		
	底 部					2	2	
合 計		158	1,290	0	75	787	2,310	

3. 土 器

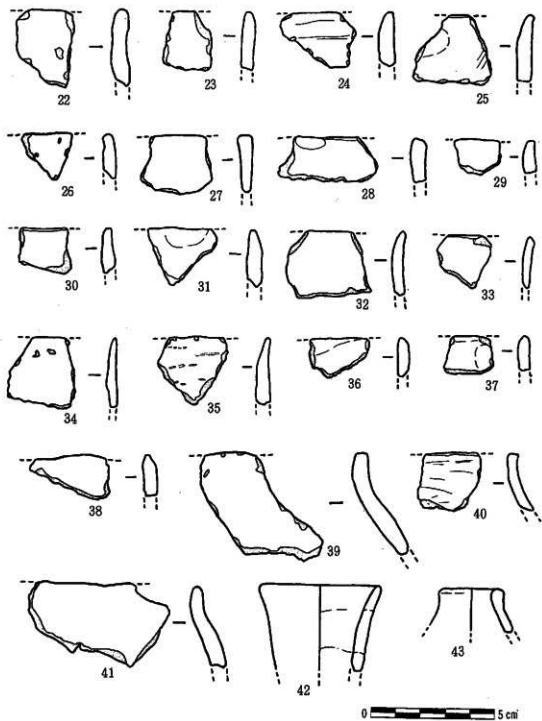
本遺跡出土の土器はすべて小破片で、復元して全形の窺える資料は1点もなかった。その内訳は第5表に示したとおりである。これらの土器を各時期ごとに分類して記述する。

(1) 中期系土器

第6図1は口縁を肥厚させ、口唇部を誇張する。胎土に石灰質砂粒を多量に混入する。器色は表面が灰褐色、裏面が橙褐色を呈する。器面は無で調整を行なっている。焼成は良好である。以上の特徴から室川式土器に属する。第I層の出土。

同図2は山形突起を有する宇佐浜式の口縁部破片で突起部も肥厚する。肥厚部の断面は規格的な三角形をなす。胎土に石英、石灰質砂粒を多量に混入し、器面はザラザラする。器色は茶褐色を呈し、焼成は普通である。第I層の出土

同図3は平口縁で口唇部は若干厚くなる。胎土に石英、石灰質砂粒、石灰質微砂粒を多量に混入し、器面はザラザラする。器色は赤褐色を呈し、焼成は普通である。崖下表採。



第7図 土器口縁部実測図

同図4は山形突起を有する口縁部破片で、胎土に石英、石灰質砂粒、石灰質微砂粒を混入する。器色は表面が暗褐色、裏面が茶褐色を呈する。焼成は普通である。崖下表採。

同図5は肥厚部の断面が扁平化した三角形をなす。胎土に石英、石灰質砂粒、石灰質微砂粒を混入し、器面はザラザラする。器色は茶褐色を呈する。焼成は普通である。表採。

(2) 後期系土器

本遺跡出土の土器の主体をなし、全出土量の91%を占める。器種は鉢形、壺形、碗形の三種がある。無文が圧倒的で有文は僅か2点のみであった。底部はくびれ平底がほとんどである。以下、器種ごとに述べる。

① 鉢形土器

すべて小破片で口径を推算できるものはなかった。これを口縁部の傾きから外反するものと直口するものに分類できる。

外反するもの 口唇の形態では丸味をもったもの(第6図6~11)、平坦なもの(同図12~18)、舌状のもの(同図19)がある。17、18は口唇部が肥厚する。

直口するもの 口唇の形態では丸味をもったもの(第6図20~第7図26)、平坦なもの(同図27~31)、舌状のもの(同図32~38)がある。

胎土は泥質で混入物の量は少なく、確認できないもの(第6図9、18、第7図26)がある。混入物の組合せとしては①石英のみ(第6図20、第7図25、30、32)、②石英・石灰質砂粒(第6図10、11、第7図27、29、33)、③石英・赤色粒(第6図15、17、19)、④石英・石灰質砂粒・赤色粒(第6図6~8、12、21、第7図23、24、28、31、36~38)、⑤石灰質砂粒・赤色粒(第6図14、第7図35)、⑥赤色粒のみ(第6図13、16、第7図22、34)がある。

器面は撫でによって調整されているが、第6図19、第7図24、25のように擦痕が残っているものや同図35のように混入物を引きずった痕が残っているものもある。

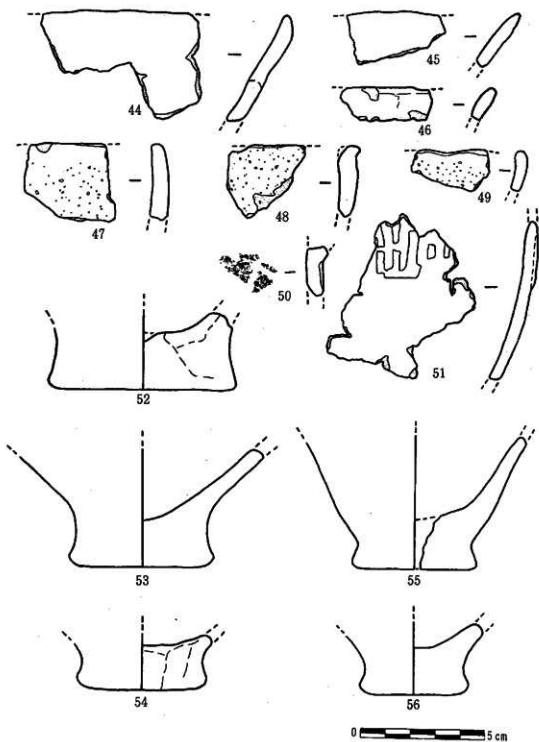
器色は茶褐色を呈するものがほとんどであるが、赤褐色、橙褐色、黄褐色のものもある。

器厚は7mm前後が一般的であるが、第7図33、34のように薄手のものもある。

② 壺形土器

第7図39~43に示した5個が得られた。

第7図39は肩の張る壺で、口唇部は平坦である。口唇部内側は平坦に成形している。胎土に石灰質微砂粒、石英を混入する。器面は撫でによって調整されている。器色は赤褐色を呈し、焼成は良好である。第Ⅱ層の出土。



第 8 図 土器口縁部・有文胴部・底部実測図

同図40も肩の張る壺と思われる。口唇部は平坦である。混入物はほとんど見られないが、稀に石灰質微砂粒を混入する。両面とも撫でによって調整されているが、条痕や擦痕が見られる。器色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。崖下表探。

同図41はゆるやかに肩の張る壺で、口唇部は舌状である。混入物はほとんど見られないが、稀に粒のこまかい石英を混入する。両面とも撫でによってよく調整されている。器色は赤褐色を呈し、焼成は良好である。N-23 第Ⅱ層の出土。

同図42は長頸の壺で、口唇部は舌状である。口径は推算5cm。泥質で混入物はほとんど見られないが、稀に粒のこまかい石英を混入する。両面ともよく調整されてなめらかであるが、裏面には輪積みの痕が残っている。器色は両面とも橙褐色を呈するが、部分的に赤褐色も見られる。M-24 第Ⅱ層の出土。

同図43は口径が推算2.6cmと小型の壺で、口唇部は肥厚する。胎土に石英、石灰質微砂粒、赤色粒を混入する。器面は撫でによって調整されている。器色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。O-25 第Ⅱ層の出土。

③ 碗形土器

第8図44～46までの3個が得られた。いずれも胴部から口縁部に直接的に開く器形になるが、44は口唇部が直口気味になっている。口唇の形態は44と46が丸味をもち、45は舌状である。胎土に44は石灰質砂粒、石灰質微砂粒、赤色粒、45は石灰質微砂粒、赤色粒、46は石英、石灰質砂粒を混入する。器面は撫でによって調整されている。器色は44と45は表面が暗褐色、裏面が茶褐色、46は両面とも赤褐色を呈する。焼成はいずれも良好である。

④ 有文胴部

第8図50は棒状工具によって鋸歯状の文様が施されている。現存分から推算して上部は肥厚すると思われる。胎土に石英、石灰質微砂粒を混入する。器色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。O-24 第Ⅰ層の出土。

同図51は凸帯を貼り付ける資料である。現存部では横位に一条、縦位に5条が確認できる。胎土は泥質で石灰質微砂粒、赤色粒を僅かに混入する。器色は橙褐色を呈する。焼成はやや悪く、器面の保持は悪い。崖下表探。

⑤ 底部

ア、分類

表探も含めて57個得られたが、これを次の6タイプに分類した。



A. くびれのカーブが強い



B. くびれのカーブが微弱



C. 立ち上がり部分の内彎状のカーブが微弱



D. 底面から立ち上がり部分まではほぼ垂直になる



E. 底面が若干丸味を帯びる

F. 破損しているため形状が窺えない不明資料

その出土状況を示したのが第6表である。

出土量を見るとA・Bタイプのいわゆるくびれ平底が多く、くびれがくずれた感じのC・Dタイプの出土は少ない。また、Eタイプの出土量は僅少で、本遺跡では特種なタイプである。各タイプごとの厚手と薄手の出土状況はAタイプでは厚手と薄手とに同数であるが、B・C・Dタイプでは薄手が多く出土している。

※ 底面の厚さが1.4cm以下を薄手、1.5cm以上を厚手とした。

※ 不明としたものは底面が破損しているもの

第 6 表 各タイプごとの出土表

土器	地区層	丘 陵 上		崖 面		崖 下	小 計	合 計
		I	II	I	II	表 探		
A	厚		5			3	8	18
	薄	3	2		1	2	8	
	不				1	1	2	
B	厚	1	2			1	4	16
	薄	1	6			3	10	
	不	1				1	2	
C	厚	1	1			1	3	8
	薄		2			2	4	
	不		1				1	
D	厚		2			1	3	11
	薄	1	6				7	
	不					1	1	
E	厚		1				1	2
	薄					1	1	
	不						0	
F	厚		1				1	2
	薄		1				1	
	不						0	
合 計		8	30	0	2	17	57	

イ、底 径

底径の推算可能なものは31個得られた。これを薄手と厚手に分け底径を測定したのが第7表である。最小が2.2cm、最大が7.6cmであるが、底径4.7～4.9、5.0～5.9cmが多く両方で全体の77.4%を占めている。薄手の最小が2.1cm、最大が6.6cm、厚手の最小が4.0cm、最大が7.6cmである。

第 7 表 底 径

底径 底面 の厚さ	2.0~2.9	3.0~3.9	4.0~4.9	5.0~5.9	6.0~6.9	7.0~7.9	不 明	計
0.9 以下				2	1		3	6
1.0~1.4	1	2	3	3			12	21
1.5~1.9			4	4	1		3	12
2.0~2.4			3	1		1		5
2.5~2.9			1					1
不 明			2	1 ^{注1}	2		7 ^{注2}	12
計	1	2	13	11	4	1	25	57

注 1. 現存部から厚手に属する。

注 2. 現存部から 1 個は厚手に属する。

第 9 図 63 は有孔の底部である。孔は両方から焼成前に穿っているが貫通はしてない。2 つの孔は一直線ではなく、A に対して B は 205° の角度から穿っている。孔の長さは A が約 7 mm、B が約 12 mm、径は A が最大 4 mm、最小 2.5 mm、B が最大・最小とも 3 mm である。底部に孔を穿つ例は他に室川貝塚 M-18 区（註 3）で出土している。

(3) グスク系土器

第 8 図 47 はやや内彎する口縁部で口唇は平坦である。胎土は泥質で混入物はほとんど見られないが、赤色粒を僅かに含む。器面にはアバタが見られる。器色は褐色を呈する。崖下表採。

同図 48 は直口の平口縁である。胎土は泥質で混入物はほとんど見られないが、稀に赤色粒を含む。器面にはアバタが見られる。器色は灰褐色を呈する。M-21 第Ⅱ層の出土。

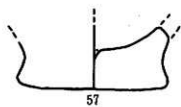
同図 49 は波状口縁で、口唇部は丸味をもつ。胎土は泥質で混入物はほとんど見られないが、稀に赤色粒と粒の細かい石英を含む。器色は灰褐色を呈する。崖下表採。

底 部

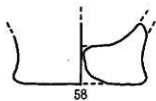
第 2 図 109 と 110 の 2 個が得られ、いずれも平底である。

第 2 図 109 は泥質で混入物はほとんど見られないが、稀に赤色粒を含む。器面は表面では雑に調整されているが、裏面は撫でによってよく調整させている。器色は表面が茶褐色、裏面が橙褐色を呈する。焼成は良好である。崖下表採。

同図 110 は底径が大きく推算 25 cm を測る。胎土は泥質で赤色粒を混入する。器面にはアバタが見られる。器厚は立ち上がり部に比べて底面は薄い。器色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。崖下表採。



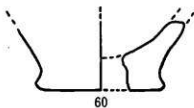
57



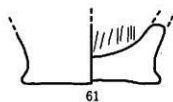
58



59



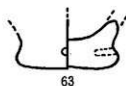
60



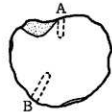
61



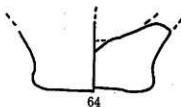
62



63



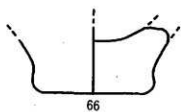
B



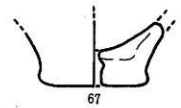
64



65



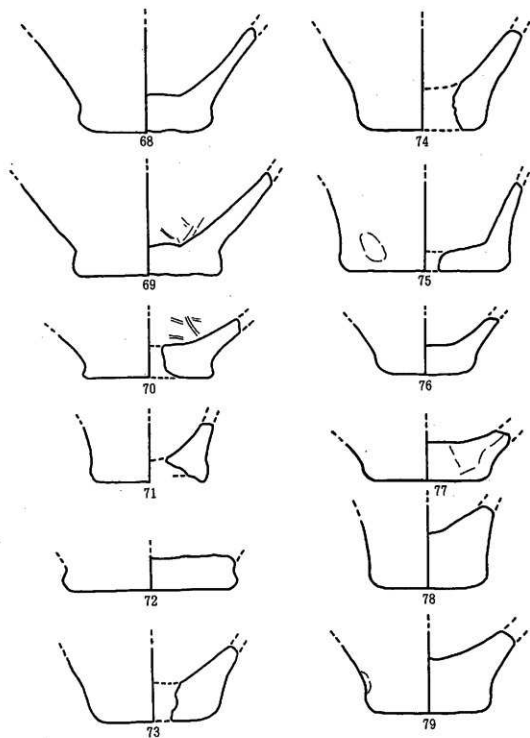
66



67

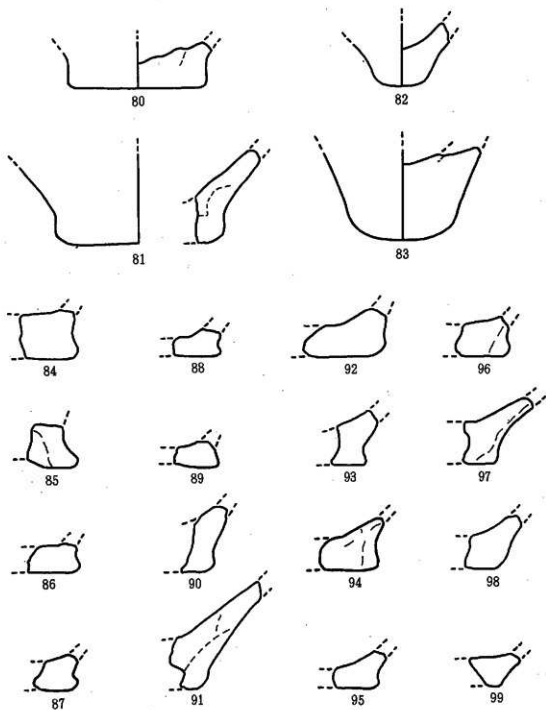
第9图 土器底部实测图

0 5cm



第10图 土器底部实测图

0 5 cm



第11圖 土器底部実測図

0  5 cm

4. 須 恵 器

第12図112に示した頸部の破片が1個得られた。表面と裏面上部には回転擦痕が見られ、裏面下部にはタタキ目が残っている。器色は両面とも灰青色を呈しているが、中心部は茶褐色である。器厚は頸部で5mm、胴部で8mmである。O-24 第Ⅱ層の出土。

5. 土 製 品

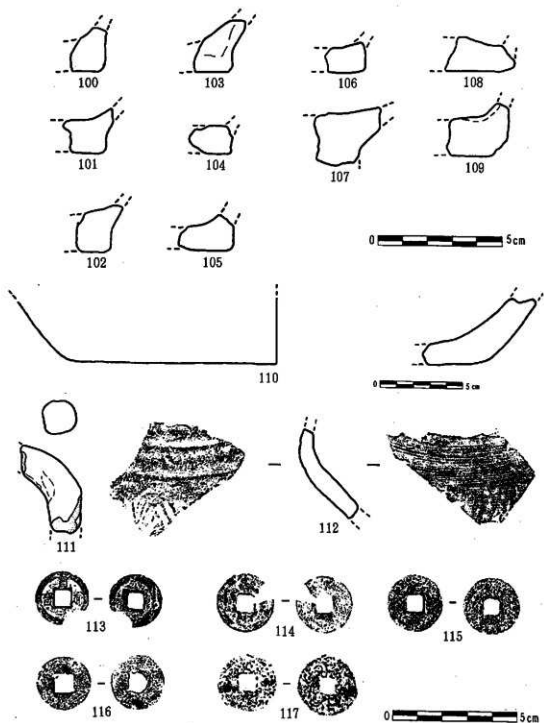
第12図111の1個のみで破損品である。平面形はゆるやかな弧状をなし、横断面はほぼ円形で、長径が1.5cm、短径が1.3cmである。胎土は泥質で赤色粒を混入する。器色は橙褐色を呈し、焼成は良好である。把手とも考えられるが破損しているため断言できない。今後の資を待ちたい。崖下表探。

6. 古 銭

第12図に示した5点が得られた。その内訳は寛永通宝1点、無文銭3点、その他の1点は腐蝕しているため確認できない。

第8表 古銭一覧表

番号	種 類	径	現存厚	重 量	観 察 項	出土グリッド層
113	寛永通宝	2.2cm	1mm	1.4g	一部欠損 緑色のサビが付着	K-28 Ⅱ層
114	無 文 銭	2.25cm	1mm	1.8g	保存が悪く、折りまがっている。 一部欠損	L-24 Ⅰ層
115	"	2.15cm	1mm	2.4g	わずかにまがっている	L-24 Ⅱ層
116	"	2.3cm	1.2mm	3.1g	わずかにまがっている 緑色のサビが付着	L-25 Ⅱ層
117	□□□□	2.4cm	1.8mm	3.3g	腐蝕のため文字は判読不可能	N-24 Ⅰ層



第12図 土器底部・土製品実測図須恵器・古銭拓影

第 VI 章 お わ り に

ガジャンピラ丘陵遺跡は、1973 年（昭和48年）沖縄県教育委員会による第 1 回米軍基地内調査（注 4）の際に発見された遺跡である。その当時、すでに丘陵上一帯は削平されており、同地からグスク系土器、青磁器が採集され、また同丘陵南方につらなるカ所の洞穴からは後期系土器、貝製品が表採られ、沖縄貝塚時代後期とグスク時代に相当する遺跡として認知されている。さらにこの調査より遡る 1952 年（昭和27年）に、現在は破壊されて存在しないが同丘陵の北側斜面中腹あたりで多和田真淳氏により貝塚が発見されている。同貝塚についてはガジャンピラ貝塚（注 5）として報告され、出土資料から沖縄貝塚時代中期と後期に属することが明らかにされている。この様に同丘陵上を含む一帯は多くの遺跡が所在していたのである。

今回の調査は、国道 331 号改築工事に関する緊急調査で、先述の遺跡のある丘陵を横ぎる道路予定路線内の発掘調査であった。その結果、遺跡の保存状態はかなり悪く、かろうじて調査区の東半分一帯に残存していることが明らかになった。表土層は、客土部分と著しい攪乱部分からなり、ところによって層厚の差が著しくあるところもあり、その直下に遺物包含層が続くが、それはきわめて薄くわずかに石灰岩基盤の凹みに残った茶褐色土層の調査となった。なお当包含層も多くの部分に現代遺物の混入がみられ攪乱を受けていた。最下部の石灰岩基盤には、同遺跡の破壊の原因となった痕跡が各所にみられ、それは①戦時中における日本軍の要害施設をはじめとして、②米軍施設にかかわる鉄骨パイル、コンクリートの基礎敷、地下電力ケーブル、③丘陵北側面からの採石による崖壁、及び④今回の国道工事に伴う北側にあった岩の崩壊とその下の包含層の崩壊面等である。この様に基盤部の著しい開発のためか今調査で遺構を認めることができなかった。

確認された層は、前述のごとく基本的に 3 枚からなり、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が茶褐色土の包含層、Ⅲ層が無遺物土層もしくは岩盤からなる。遺物はⅠ層も多くみられ、Ⅱ層においても沖縄貝塚時代中期・後期・グスク時代の 3 時期の資料が混在するかたちで検出された。ただこれら資料は、时期的違いにより包含量が異なっている。資料は貝製品、石器、土器、須恵器、土製品、自然遺物等で、量的には時期の指標となる土器が最も多く得られている。

本遺跡の上限を示すのが、いわゆる沖縄貝塚時代中期の室川式土器、宇佐兵式土器であるが出土量が微量であり、今となっては本地区が遺跡の拠点であったかは確かめようがないが近隣の天久遺跡（注 6）、ギリチ原遺跡（注 7）と共通して丘陵上一帯にあるので、かつてはプライマリーな包含層が存在していたものと推量される。

後期系土器は、出土資料中最も多く得られたもので、すべて細片で復元しえるものは

ないが器形上、鉢形、壺形、碗形が認められる。特徴的なものとして鉢は、口縁が外反ないし直口を呈し、底部にいたりくびれた平底をなすものである。壺は、肩のやや張るものと、長頸のものがみられた。碗は細片のため全容は明らかではない。ところで、この期に属しめた底部はすべてくびれ平底をなすものであるが、詳細に観察すると、くびれ部の形状と底部器厚にバラエティーがみられ、その内ち、主としてくびれが明瞭で(A・Bタイプ)、底部壁の厚いものが傾向的に多く、その逆のものは少い特徴をもっていた。底径は4.0～5.9 cmに集中している。同形の土器を出土する西原町与那城貝塚(注8)のものに比較すると、前遺跡のものが、くびれがややつまり、底部器厚が薄いのがより認められる相違があり、このことは器種の違いか、時期的なものか明らかにしがたい。又、従来同型式と考えられていた真栄里貝塚の資料が、弥生系統の土器群ということが明らかになっている現在(注9)、本遺跡の時期的位置についても今後の研究を俟ってつめていきたい。その他に土器底部(高台部分)に横位の有孔資料(第9図63)が認められたが同種のものに室川貝塚(注10) 湾貝塚(注11)のものがあり、その意義についても今後注意される。

本遺跡の下限をあらわすものがグスク系土器で、アバタの器面と、底径の広い(計測値25cm)平底を特徴としており、いわゆるフェンサ上層式土器に属するものである。出土量は後期系土器に次いで多い。丘陵上に立地していることより、同時期の遺跡と同様に石積遺構の有無、そのあり方に注意されるが、本点についても、遺跡一帯が変貌した今日にいたっては確めようがない。又、その他貝製品、須恵器、古銭、自然遺物も検出されているが、いずれの時期に共伴するかは他の未撈乱遺跡の研究を俟って検討されるものと思われる。

以上、得られた資料は層位的状況をおさえることは不可能ではあったが、今後の遺物研究に資するものは多いものと考えられる。又、那覇市街の一帯の低地における同丘陵に、各時期の遺跡が重なり、かつ集中するのは、地理的必然性と同時に古代人の生活の格好の適地であったことがあらためて確認された。

参 考 文 献

- 註1 大宜味村教育委員会 「喜如嘉貝塚発掘調査報告書」 1979年
- 註2 伊平屋村教育委員会 「久里原貝塚範囲確認調査報告書」 1981年
- 註3 沖縄市教育委員会 「室川貝塚範囲確認調査報告書」 1979年
- 註4 沖縄県教育委員会 「第1回米軍基地文化財調査メモ」
昭和49年度 文化財要覧 1974年
- 註5 高宮廣衛 ガジャンピラ貝塚「那覇市の考古資料」『那覇市史』資料篇第1巻1
1968年
- 註6 高宮廣衛 天久遺跡 ”
- 註7 高宮廣衛 ギリチ原遺跡 ”
- 註8 西原町教育委員会 与那城貝塚 1980年
- 註9 琉球新報・沖縄タイムス 真栄里貝塚発見の弥生式土器 1983年 2月17日
- 註10 註3に同じ
- 註11 多和田真淳 鬼界島湾貝塚「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」
『沖縄文化財調査報告』1956～1962年 那覇出版社 1978年

那 覇 市 内 遺 跡 一 覧 表

1.	ギリチ原貝塚	沖縄貝塚時代後期
2.	崎樋川貝塚	沖縄貝塚時代前期・後期
3.	天久グスク	グスク時代
4.	天久遺跡	沖縄貝塚時代中期
5.	天久貝塚	沖縄貝塚時代前期
6.	末吉町鹿化石出土地	旧石器時代
7.	首里西森遺物散布地	旧石器時代・グスク時代
8.	山川貝塚	沖縄貝塚時代中期
9.	虎頭山石器出土地	不明
10.	鳥堀古瓦窯跡	
11.	首里城跡	
12.	崎山遺跡	旧石器時代
13.	崎山御嶽遺跡	
14.	玉陵南側洞穴遺跡	グスク時代
15.	嵩下原貝塚	沖縄貝塚時代前期
16.	嵩下原第1洞穴	旧石器時代
17.	識名園内遺跡	沖縄貝塚時代中期
18.	シーマ御嶽遺跡	グスク時代
19.	識名貝塚	沖縄貝塚時代中期
20.	識名原遺跡	グスク時代
21.	識名原遺跡A	旧石器時代
22.	識名原遺跡B	旧石器時代
23.	魚下原遺跡	グスク時代
24.	魚下原第1洞穴	旧石器時代
25.	石田遺跡	不明
26.	石田グスク	グスク時代
27.	石田古墓遺跡	不明
28.	壺川貝塚	沖縄貝塚時代前期
29.	城岳貝塚	沖縄貝塚時代前期
30.	波上洞穴遺跡	沖縄貝塚時代後期
31.	三重グスク	
32.	屋良座森グスク	
33.	御物グスク	
34.	ガジャンピラ丘陵遺跡	沖縄貝塚時代中期・後期
35.	住吉遺物散布地	沖縄貝塚時代前期・後期
36.	山下町第1洞穴遺跡	旧石器時代
37.	トゥムイ古墓遺跡	
38.	カニマン御嶽遺物散布地	グスク時代

那覇市内遺跡分布図

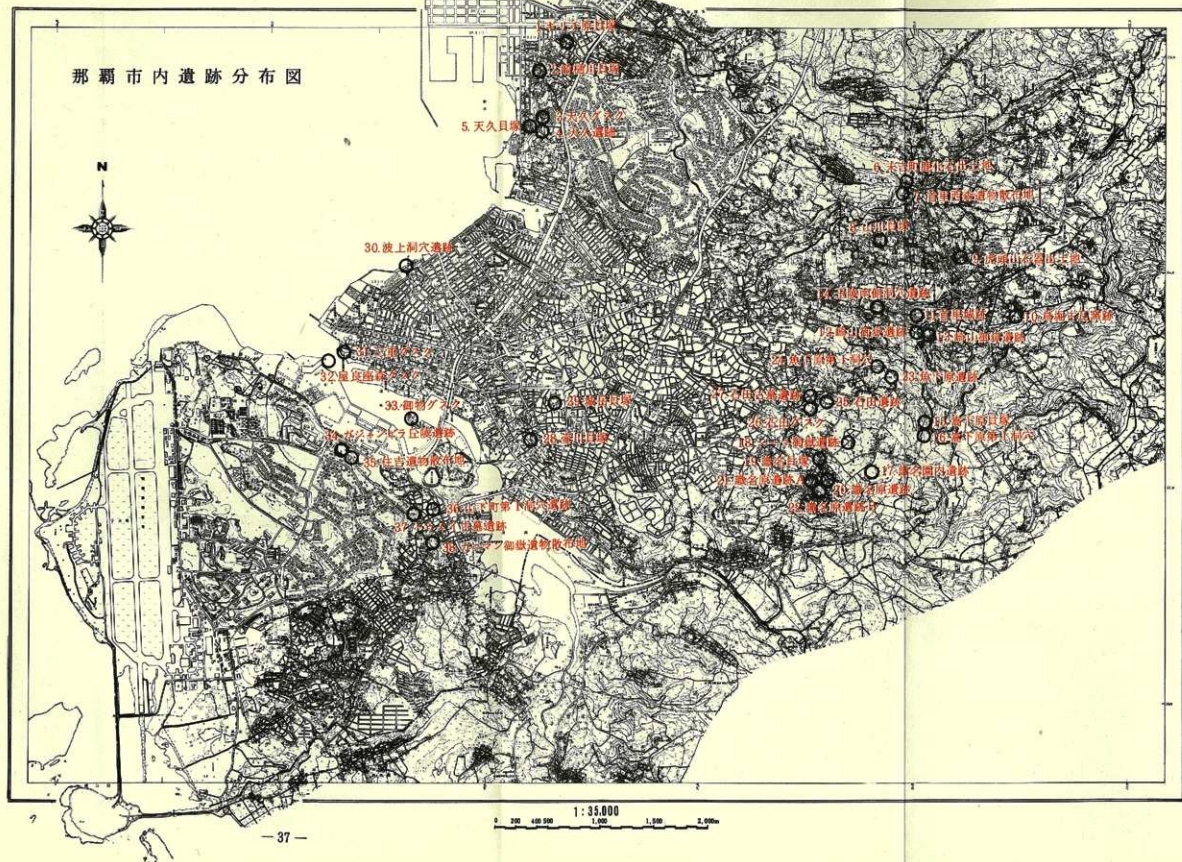
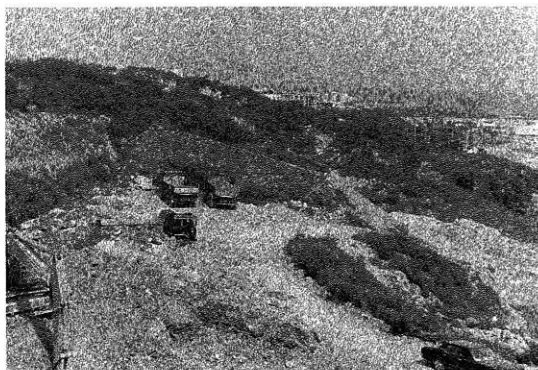
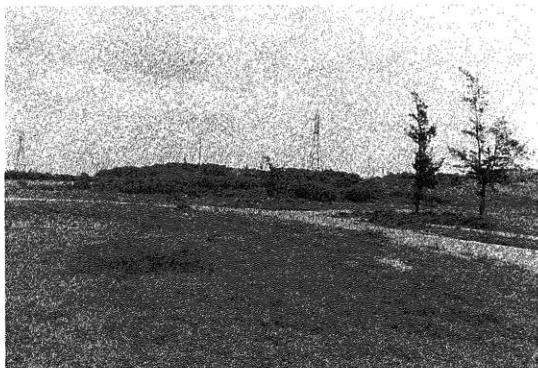
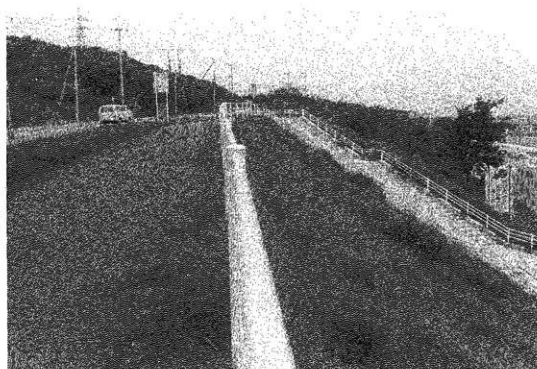
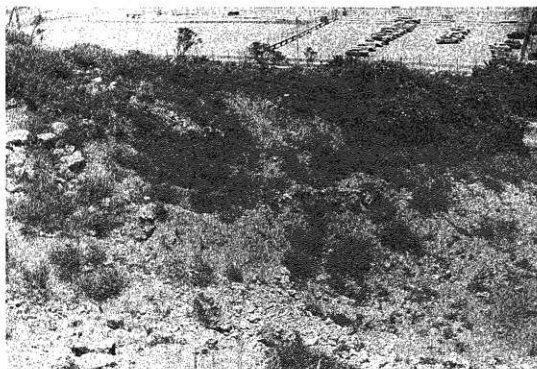


圖 版



図版 1 上 遺跡遠景（南側より）
下 遺跡近景（東側より）



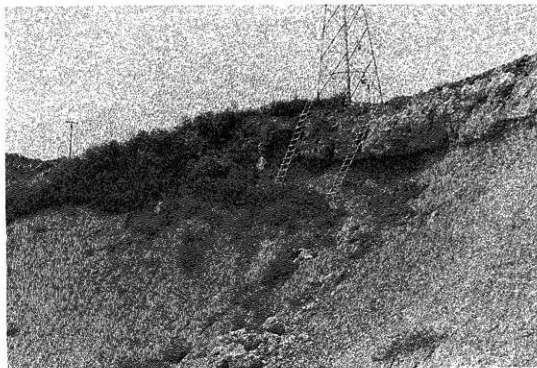
図版 2 上 採石場跡
下 丘陵北側斜面



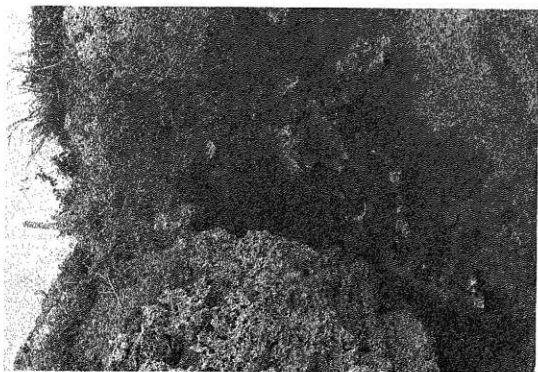
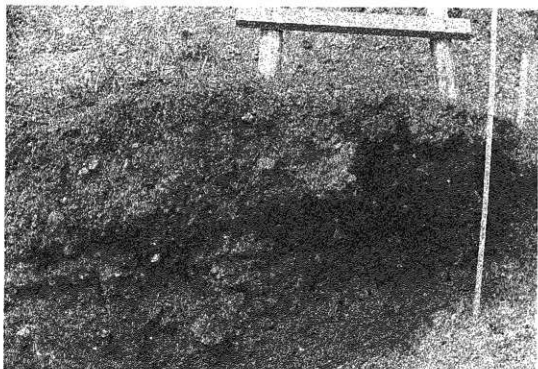
図版 3 上 発掘状況
下 発掘後の石灰岩の状況



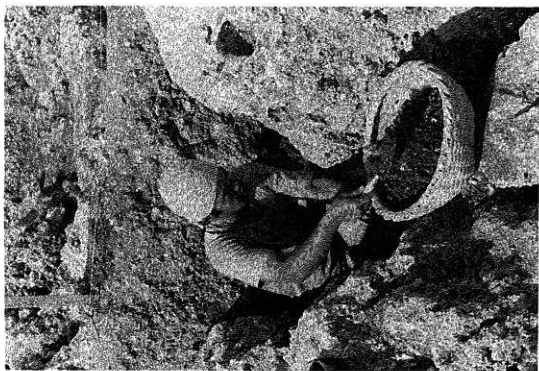
図版 4 上 O・P-19・20グリットに現われた高圧線鉄塔跡
下 電力ケーブル跡



図版 5 上 採石によってできた崖面
下 崖下での遺物採集作業



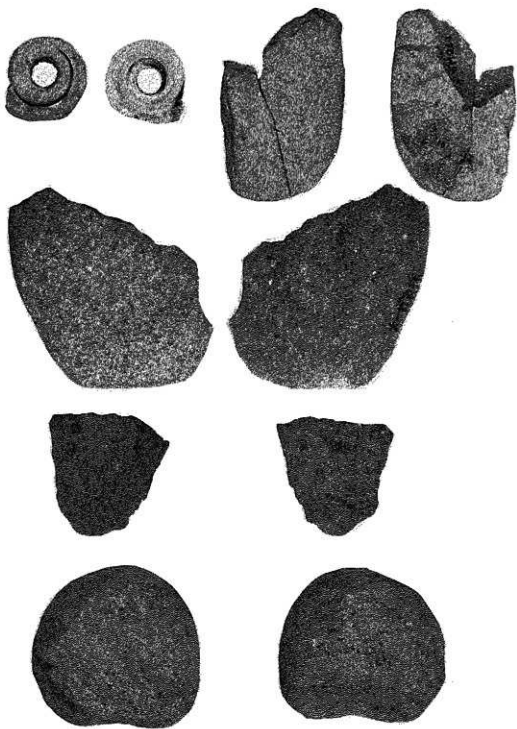
図版 6 上 崖下の堆積土
下 崖面に堆積している包含層



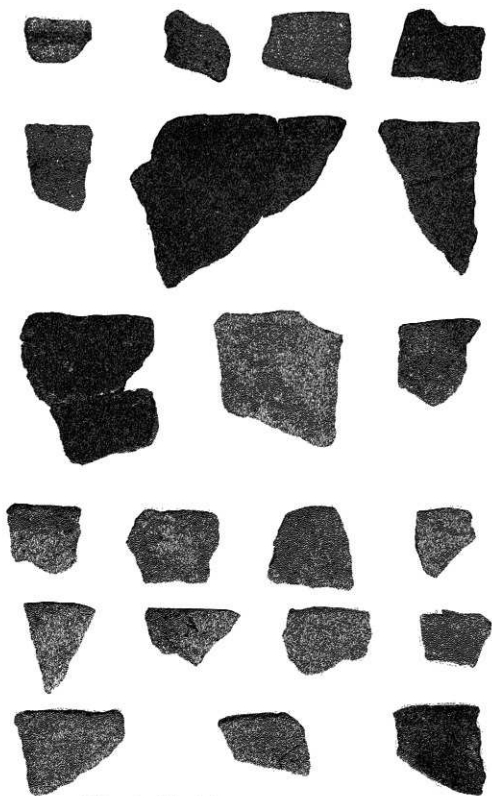
図版 7 上 土層断面
下 石灰岩割れ目の発掘作業



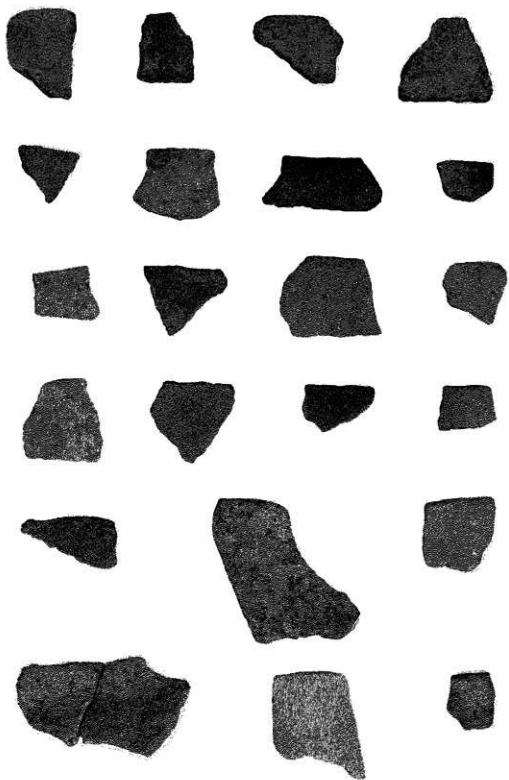
図版 8 遺物出土状況



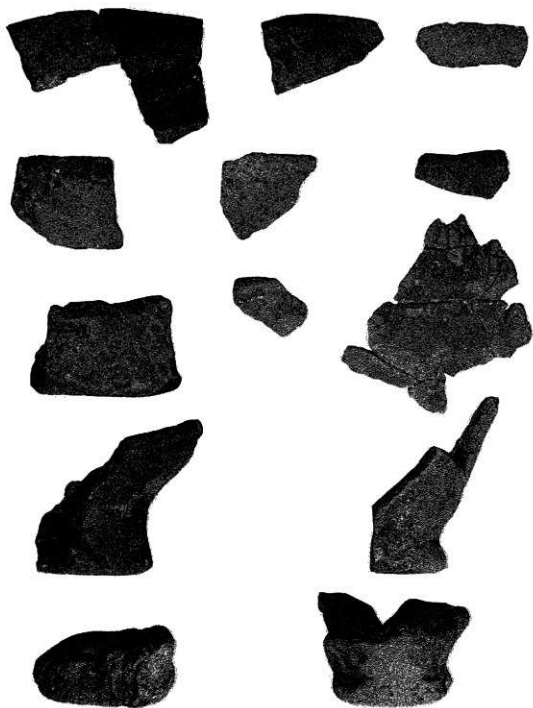
図版 9 貝製品・石器



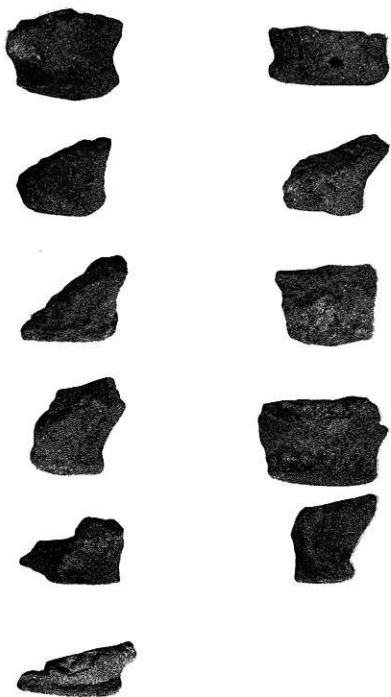
図版 10 土器口縁部



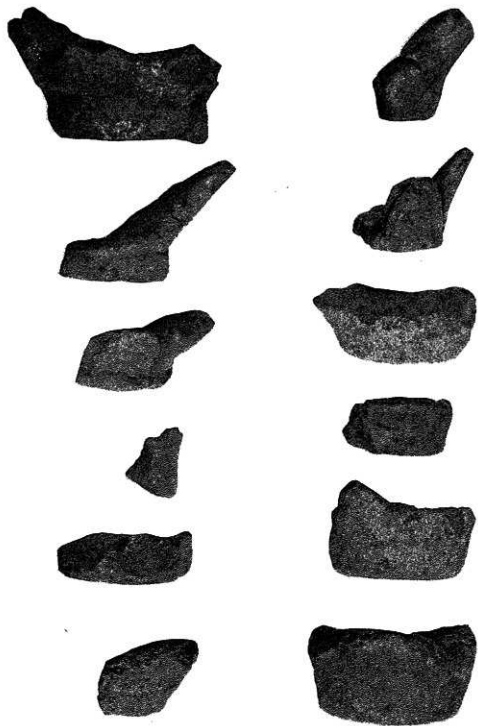
图版 11 土器口縁部



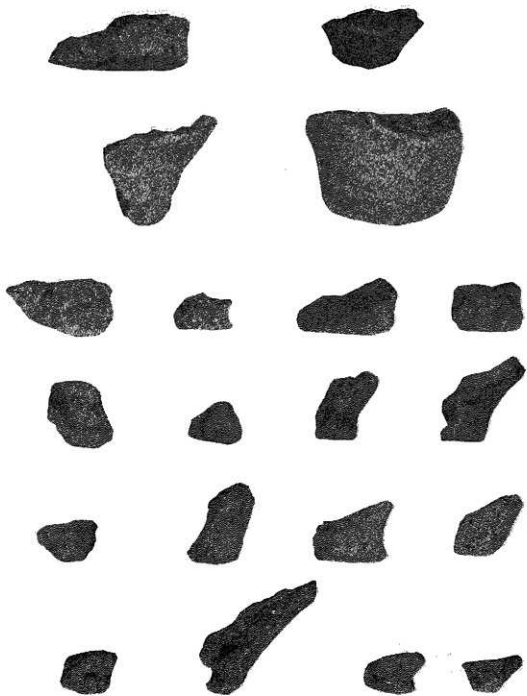
図版 12 土器口縁部・有文胴部・底部



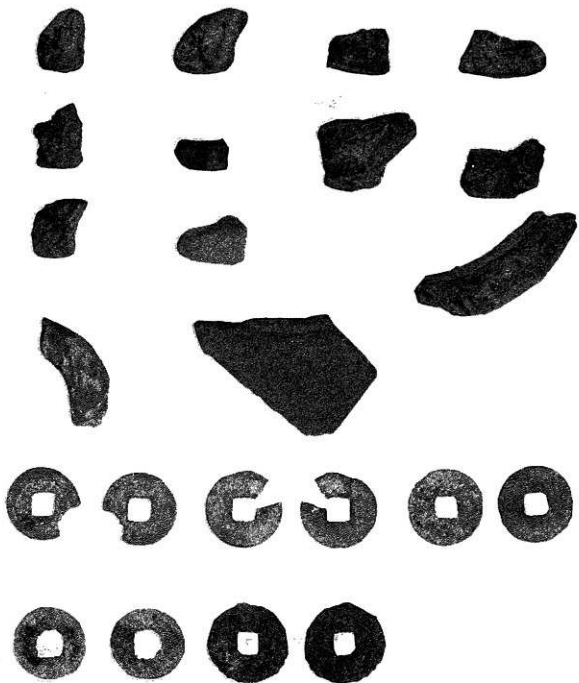
圖版 13 土器底部



图版 14 土器底部



图版 15 土器底部



図版 16 土器底部・土製品・須恵器・古銭

那覇市文化財調査報告書第7集

ガジャンピラ丘陵遺跡発掘調査報告書 ©

編集 那覇市教育委員会社会教育課

発行 那覇市教育委員会

沖縄県那覇市樋川2-8-8

TEL 0988-32-4166(内線50)

発行日 1983年2月

印刷 平山印刷

那覇市寄宮1丁目12-3

TEL (0988) 32-0177